『比較民俗研究』3．1991／3

書　評

杉山晃一，櫻井哲男編
『韓国社会の文化人類学』

川森博司※

編者の一人，杉山晃一によれば，「朝鮮半島や中国の諸民族文化を対象とする人類学的研究は日本では第二次世界大戦後長い間不振であった。」そして，それは「いわゆる不幸な関係が我が国との間に存在し，斯学の前提となる実地調査など長らく困難であっただけでなく，複雑な文化をもつ文明民族は研究の対象としにくかったからであろう」と杉山は述べている（p. 1)。国立民族学博物館における共同研究「韓国社会の人類学的研究－方法論の検討－」の報告書である本書は，「複雑な文化をもつ文明民族」を研究するための文化人類学的な方法論を模索する試みとして読むことができる。日本人による人類学的な韓国研究の論文集としては，中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』（東京大学出版会，1973)，江守五夫，崔龍基編『韓国両班同族制の研究』(第一書房，1982)があるが，ともに韓国と日本の研究者の協力による論文集で，前者には4名，後者には2名の日本人研究者が執筆しているだけである。その点で，11名の日本人研究者の論考が収められた本書は，人類学的立場からの韓国研究の現時点での成果を知り，今後の展望を得る上で，大変重要な位置をしめるものである。11の論文は，「Ⅰ　地域性と歴史」，「Ⅱ　人と社会」，「Ⅲ　生活と意識」の3部に分けられているが，方法論的には，一つの村落をこえる次元の問題の取り扱いと，文書資料の利用による歴史的視点の導入が大きな課題となっている。そこで，以下では，この二点を中心に，本書が示した新たな方法論と今後の課題を検討してみることにしたい。

※国立歴史民俗博物館民俗研究部助手

1．一つの村落をこえる次元の問題

人類学的研究は，一つの村落の中に長期滞在して，参与観察と面接聞き取りを中心に，インテンシブな情報を集めることを得意としてきた。このような人類学のオーソドックスな方法は，韓国社会を研究する上でももちろん有効であるが，大きな制約をもっている。たとえば，韓国社会を特徴づけている父系の親族組織は，居住地によって制約されず，村落をこえて，非常に広い範囲のネットワークをもっている。まず，このような空間的な広がりをとらえることが，従来のオーソドックスな方法ではむずかしい。また，韓国社会がもつ長い歴史の蓄積を視野に入れることも，参与観察と聞き取りだけからでは限界がある。本書を通読して浮かび上がってくるのは，このような集約的なフィールドワークの有効性と時間的・空間的限界とのせめぎあいの問題である。

朝倉敏夫の「韓国社会の地域性」は，これまで手薄であった韓国社会・文化の地域性をめぐる研究の問題点を整理して，人類学的方法にもとづくフィールドワークの成果を総合し，より包括的な韓国社会・文化の姿を描いていくための展望を示している。日本では親族論が地域類型論として展開されたのに対し，韓国ではもっぱら「両班」と「常民」という階層に関して論議されてきたことについて，民村に多く班村にはまれな「芽亭」という部落共同の休息・集会所が全羅道に集中して存在していることに触れ，地域差への注意を喚起している箇所は，今後の研究課題として非常に興味深い。また，韓国社会が全体として，日本社会に比べて均質性が強いのではないか，という点に関して次のように述べている。

「この韓国社会の均質性の高さは，日本社会における多様性と比して，それ自体が大きな特色であり，この違いは韓国と日本における社会統合のあり方の相違も示している。日本では，歴史的・自然的条件の相違によって地域による多様性が生まれ，多元的に統合されてきたのに対し，韓国では李氏朝鮮以降，儒教による「正当的な」伝統が形成され，一元的に統合されるという歴史的条件

に強く規定されてきた。日本社会が融通性をもって状況に対応しているのに対し，韓国社会は規範を遵守し，それに拘束的であるともいえよう。」（pp. 15-16）

この指摘は，今後のさまざまな視点からの韓国社会・文化の研究において，一つの指標として検証していくべき重要な課題と思われる。

また，済州島の特異性について，「済州島が両班モデルから外れた「周辺」という区分の中にとらえられるのか，済州島の特異性が独自のものであるのか」を，済州島とその近隣島嶼との比較および済州島内部での内陸部と海岸部の比較などによって，考察する必要があることを指摘している。

松本誠一の「洞里の境界」は，フィールドワークの対象としての村落の単位，村落の境界の問題を扱っている。韓国の村落の性格について，松本は次のように述べている。

「二つの見方がある。昔から村落（洞里）の境界はゆるかった，あるいは昔は村落の境界は堅かったと。前者を支持する論拠としては，［一つの村落のまとまりをこえて］父系親族原理が強く働いていた，［日本の］幕藩体制の中央－地方権力重層支配と異なり，中央集権の度が顕著に強く，地方社会の自立性が発達しなかった，などが注目される。後者を支持する論拠としては，父系親族原理（儒教大伝統）の浸透（両班化，ヤンバナイゼーション）が常民層にまで及んだのはきわめて新しい現象であり，遠隔地の親族との交際は経済力の上昇と通信・交通の発達に伴い実現されてきた。また，集村が多いのはなぜか。人口的に多かった常民層は洞里の地縁に第一に依拠した。洞里の範囲の社会慣習・民俗行事の名残がみられる，などが挙げられる。しかし，後者の見方については論証がまだ浅いと思われる。」（p. 58［ ］内は評者の補充）

そして，朝鮮総督府が1909年から1916年にかけて洞里合併を進め，洞里数が半分以下に減少していることに注目し，鈴木栄太郎と解放後の韓国の社会学者がともに，韓国の自然村ないし自然部落は日本に比べて集団組織性が弱いと指摘していることについて，「新洞里」制度の施行年限および解放後の行政区域の改変などを考慮する必要があること，現在資料化が進められている『洞案』という洞里の成員を記述した文書が，旧洞里のイメージをつかむための鍵になる可能性があることを指摘している。また，韓国における集団の性格を示す一例として，ソウルのＫ大学前の商店街をとりあげ，店子の流動性が高く，雇われ店員の流動性はさらに高いこと，商店会というものがなく，通りの向かい同士の店の主人がお互いの名も知らないこともあること，などを記述している。

さて，松本は上述のように，韓国の村落研究において『洞案』という文書利用の可能性を示唆しているが，具体的に文書の分析を人類学的研究に取り入れたのが，嶋陸奥彦の論文と杉山晃一の論文である。

２．歴史的視点の導入

韓国社会を特徴づける父系親族のネットワークは，一つの村落をこえて広がり，また歴史的に複雑な過程をたどっているので，一つの村落の中に長期滞在するという人類学のオーソドックスな方法だけでは十分な理解はむずかしい。嶋の「族譜－歴史人類学的展望－」は，それぞれの氏族がもっている族譜に記載された情報をコンピューターを用いて分析することによって，時間的・空間的に制約されたフィールドワークによるデータを，それをこえた次元に結びつけようとしたものである。族譜からは，世代，親子関係，性別，兄弟姉妹間の男女別の出生順，名前，生年，卒年［没年］，墓地の所在地，配偶者（の姓と本貫），実子・養子の別，養入先・養出先などの標準化された個人情報を読み取ることができ，コンピューターに入力して分析することが可能である。実例として，栄州徐氏の一つの支派の族譜を分析した結果，17世紀中期にはじめて養子の事例が現れることがわかり，この時期が祭祀継承が重視されていく過程における一つの転換期であるという歴史学的研究の結果と一致する。また，その後，実子のない場合に養子を立てる傾向が次第に強まっていくことが，コンピューター分析によって明らかになって

いる。さらに今後の展望として，年月をおいて改訂される族譜の異版を重ね合わせて比較分析することを提唱している。なぜなら，新しい版の族譜の編纂の際しては，子孫がいないと思われていた人の後裔の存在が確認されたり，行方不明だった子孫が見つかったり，祖先の墓の確認によって分断されていた系譜が明らかになったりして，旧版に収録されていなかった人物が追加されるようなことがある。このような各版の間のズレを，コンピューターを使って考察することによって，族譜の編纂過程における子孫たちの系譜復元への意志や行為，それに対する編纂者たちの判断など，族譜に書かれなかった情報に照明をあてていく可能性があることを示している。

嶋の論文は，特定の種類の文書をコンピューターに入力して分析し，フィールドワークによる実態調査とあわせて，親族組織の展開の歴史的過程に迫っていくという新しい方法論を示したものであり，文明社会における人類学的研究に大きな示唆を与えるものである。

杉山晃一の「行喪契－契の記録から－」も，フィールドワークにもとづくデータと文書の記録の分析を結びつけようとする試みである。杉山は，慶尚北道の一農村における10カ月間の集約的な実態調査によって得た情報にもとづきながら，その歴史的変遷を知るために，地方文書の活用を試みている。行喪契は，葬儀（喪礼）の準備のための相互扶助組織であり，杉山の調査村には，二つの行喪契が存在して，両契とも毎年の契の活動に関する記録を作成し，よく保管している。その記録の分析から，この種の契は，必ずしも父系親族組織や洞組織と重ならず，有志の組織としてはじまっており，しかも複数世代にわたる息の長い歴史をもつことが指摘される。一つの契は70年，もう一つの契は30年の歴史をもっており，このように組織が長続きしている理由として，杉山は，共有農地からの存在と喪輿の貸し出しによる収益を考えている。このような持続性をもつ契の存在することから，伊藤亜人（1977）による「契は発生と消滅を繰り返し永続性をもたない」という見解を再検討することも今後の課題となってくる。このように杉山の論文は，一つの農村とその周辺に地域を限定したものであるが，文字記録利用の必要性と有効性を手堅い形で示している。

依田千百子の「韓国の食文化と女性－主婦の揚名・儒教・富の再配分－」は，韓国の食文化における女性の役割の大きさを示すものとして，1650年頃，慶尚北道の山間僻地の一両班家の主婦，張氏夫人によってハングルで書かれた料理書『飲食知味方』をとりあげている。これは男性の手による漢文の料理書『山林経済』治膳篇に数十年先んじるものであり，男性の手によるものが中国の料理書からそのまま転載した項目が大部分であるのと異なり，後孫たちに伝統的な家門の料理法を伝えようとしたものである。さらに，1815年頃には徐有本夫人が，ハングル版家庭百科全書といえる『閨閤叢書』を著している。日本では，平安時代に女性によって多くの物語類や日記文学が書かれたが，女性による料理書は明治になるまで現れない。これに比べると，韓国では女性による料理書は，かなり早い時期に出現している。依田は，『飲食知味方』の中に「その家の味」を覚えることの大切さが説かれていることに注目し，儒教イデオロギーによって規制された男性中心の李朝時代において，各家庭特有の味をもつ料理によって客をもてなすことは，女性たちが自らの存在を強く主張し，その能力を存分に発揮することのできる揚名の機会であった，としている。また，現在においても，韓国の伝統的韓国料理・飲食店の主人は，ほとんどが女性で，料理人も圧倒的に女性の方が多いことを示し，祖先祭祀や巫祭（クッ）において女性の料理が大きな役割を果たすことから，韓国の女性の食べ物との関わりは，単に私的な家庭内の食事のレベルをこえて，共同体レベルにまで拡大された，きわめて社会的な性格をもっている，と結論づけている。このように依田の論文は，特定の地域のフィールドワークにもとづくものではなく，料理書という歴史資料と人類学的調査による研究の諸成果を総合して考察していくという方向性を示している。

その他，末成道男の「韓国と中国漢族の大小リニージの比較」は，韓国における二つの調査地の事例，台湾おける二つの調査地の事例，あわせて四つの事例を比較検討するという形で，一つの村落の事例の分析という次元をこえて，韓国のリニージの一般的特徴を抽出しようと試みたものである。

津波高志の「済州島の通婚圏」と櫻井哲男の「ソリの展開」は，ともに済州島の一村落の集約的な調査によるデータをもとに議論を展開したものである。このうち櫻井の論文は，一つの集落において綿密な情報を集めるという点では人類学のオーソドックスな方法によっているが，自然音と人為音の体系を記述し，「環境の音」，「民俗の音」という枠組みを設定していく手法は，人類学にとってはきわめて新鮮なものである。本書では，歴史的研究の導入を除けば櫻井のもの以外にあまりないが，人類学以外の学問の手法を人類学的研究の中に導入していくことは，複雑な文化をもつ文明社会の研究において，今後ぜひとも必要とされる方向性だと思われる。

丸山孝一の「離島研究の一視座－巨文島を事例として－」は，離島には，中央文化との同一視を求める求心力と同時に，地理的に隣接する異文化に近いことにより，海外，異文化への飛躍を志向する遠心力が逆のベクトルをもって作用しているという視点から，全羅南道の巨文島の事例にもとづいて，島嶼文化一般の性格を考察したものである。

祖父江孝男の「韓国人の意識と行動－今日までの諸研究の比較考察－」は，1975年以降に刊行された12点の韓国文化論，韓国人論を概観し整理したもの，また，片山隆裕の「韓国における女性と儒教」は，韓国における儒教，巫俗，民間信仰と女性の関係をめぐる分野の研究史を整理・検討したものである。

さて，以上で検討してきたように，本書でもっとも具体的に示された新しい方法論は，文書資料を利用してフィールドワークのデータを歴史的な時間軸における変遷と結びつけていく手法であり，このような歴史的視点の導入と関連して，一つの村落をこえた次元で韓国の社会・文化の性格を理解していく可能性が示されている。反面，片山や依田の論文である程度示唆されてはいるが，構造論や象徴論などの手法はあまり全面に出されていない。これは，これまでの日本における韓国社会の人類学的研究が，父系の親族組織を中心とする社会組織の分析に重心を置いてきたことと関連しているようである。本書の諸論考は，手堅いがややスタティックな印象を与える。つまり，フィールドワークを根幹とする学問ならではの社会のダイナミックな側面の分析が，本書ではあまり示されていない。松本の論考で示唆された植民地時代における政治的なせめぎあいの問題，近代化の過程における村落社会の変容の問題，あるいは現代における都市の問題など，本書では未開拓の興味深い分野が数多く残されている。本書で示された研究成果をふまえて，これらの未開拓の領域に取り組んでいくことによって，韓国社会の文化人類学的研究は，現代の日本で生活するわれわれの切実な課題に対応するものになっていくであろう。

参考文献

伊藤亜人　1977　「韓国社会における契－全羅南道珍道の事例－」『東京大学東洋文化研究所紀要』第71冊.

渡邊欣雄著
『民俗知識論の課題』
－沖縄の知識人類学－

島村恭則※

本書は，著者が提唱している民俗知識論に関わる論考を集めたもの。全体は5部から成る。民俗（的）知識とは，人類学者が調査・研究の対象と

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科